

元NHK解説委員長  
評論家

# 山室英男さん



元NHK解説委員長の山室英男さんにお話を伺った。戦後昭和史の生き証人とも思える豊富な取材経験と、それに裏打ちされたお話は非常に興味深く、あっという間に時間が過ぎてしまった。特に、日本を知らなければ国際理解は覚束ないとのこと指摘は、体験に裏打ちされているだけに、説得力あるものであった。

(聞き手・構成：深草 剛志)

— 海外在住経験が豊富ですが、その折りの苦労談や、ご経験などをお聞かせください。

好奇心が旺盛だったためか、苦労はあまりありませんね。それよりも、驚くことが多かったと思います。

— ソウル赴任当時の韓国情勢はいかがでしたか。

私は、1966年から67年にかけて、韓国のソウル支局長を務めておりました。1965年に日韓基本条約が締結されましたので、日韓外交正常化後、最初のソウル支局長ということになります。板門店で、朝鮮戦争の休戦会談が開かれていた頃のことです。随分前の話なのですが、最近の報道で、朝鮮戦争は現在も休戦中、つまり、国際法上、戦争は継続しており、今も終わってはいないのだということを改めて認識させられました。

— 休戦会談はどのような様子でしたか。

報道陣は、会談には同席できません。だから、その模様は窓の外から覗き見できるだけで(笑)、取材は、その後の記者発表で行なっていました。会談を行なっている室内には、韓国側、国連側、北朝鮮側の出席者の他に、中国人民義勇軍の代表者もいたのですが、おもしろいことに、何故か、中国人民義勇軍の代表者は、会談には背を向けて座っているんですね。発言を

している様子もありません。まるで、オリンピックのように、参加することに意義があるとでもいうかのようでした。

— その後は、ヨーロッパでご活躍されていたようですが、韓国以上に文化の違いを感じられたのではないのでしょうか。

私は、ソウルから帰国して、20日間日本に滞在した後、すぐにジュネーブに赴任し、1967年から3年間、ジュネーブ支局長を務めました。スイスに着任後最初に思ったのは、スイス・フランの強さです。ソウルでは3人雇用していたのですが、スイスでは、1人分の賃金でこの3人分の賃金を超えてしまうのです。そのため、カメラマンを雇うこともせず、自分でカメラを回していました。どうしても必要なときだけ、現地の報道機関で、高いお金を出して、カメラマンを雇っていました。

— 嫌なことなどはありましたか。

スイスは条約上永世中立を保証されているのですが、そのことが、スイス人の心理に様々な影響を与えているようでした。例えば、スイス人から見ると、戦争をやっている国が馬鹿に見えるようです。他方、他国からは、時計とチョコレートだけの国のように思われ、

国際平和に貢献していないと見られているのではないかと、ひどく気にしています。外国人と接するときも、肩肘を張ってみたり、うつむいてみたり…、ですから、こちらとしては、つきあうのに疲れるという面がありました。

— ジュネーブで取材をされて興味深かったことはありますか。

ジュネーブには国連の支部があるのですが、僕が支局長を務めている間に、核不拡散条約が調印され、これを取材しました。また、ベトナム戦争終結に向けて、アメリカ合衆国と北ベトナムとの秘密接触がここで行なわれ、それをスクープするという経験もしました。

— スイスは、国際会議の舞台となることが多いですね。

ジュネーブは、国際会議の舞台になること、特に平和会議の開催地となることを、ウィーンやパリと競っているようなところがありました。ですから、会議に出席する各国要員の宿泊費の内、半額をスイス政府が拠出するとか、ソフトドリンクを飲み放題にするとか、そういうことをやってまで会議を誘致しようとしていたのが興味深かったです。

— まるでイベントですね。

そうですね。貸席業者たちのオリンピックみたいなところがありますね。

— ところで、著書『トマスの人差し指』（日本放送出版協会、1990年）の中で、インターナショナルとは、ナショナルなもののおつきあいだから、まず何よりも自国の中で立派な人であれということをおっしゃっていますね。

私は、自分が日本人であるという自覚なしに、国際社会で発言したり、仕事をしたりすることはできないと思っています。例えば、人には、コミュニケーションをするに当たって、それぞれ心地よいと感じる距離感、つまり「個体距離」というものがあると思うのですが、これは民族によって違うんですね。それを理解していないと、会話をしている一方は近づきたがり、他方は遠ざかりたがる。その結果、会話をしながらテーブルを一周してしまうなんてことも起こるわけです（笑）。こういった違いがあることを理解し、それを前提として、話をしないといけないのだと思います。こ



自分が日本人であるという自覚なしに、国際社会で発言したり、仕事をしたりすることはできないと、私は思っています。

#### プロフィール やまむろ・ひろお

1950年NHK入社。ソウル支局長、ジュネーブ支局長、ヨーロッパ総局長（在パリ）を経て、NHK解説委員長を務める。1988年、フランス政府より「芸術文化勲章・オフィシエ賞」受賞。1990年NHK退職。以後、評論家として活動。政治、外交問題を中心に、多数の著書がある。

のような違いのあるもの同士が理解しあうには、一緒に仕事をするのが一番です。私は、そういう経験を繰り返すことが国際理解につながるのだと、イギリス人から教えられました。

— 「書生論」、「理想論」を振りかざす外交官が減ったと、先の著書の中でも指摘されていましたが、これはどういう趣旨でしょうか。

「書生論」と「理想論」に対立するのは、「現状肯定」です。しかし、少しでもよくしよう、変えていこうという気持ちがなくなったら、人は生きてはいけないのではないのでしょうか。それが心配ですね。

— では、裁判員制度については、どうお考えですか。

私は、日本人は、「主情的」という意味では世界最右翼に位置すると思っています。ですから、正直なところ、裁判のようにドライな合理的判断が求められる場面では、非常に難しい問題も生じるのではないかと、思っています。犯罪被害者の出廷も認められるようになりましたが、素人である裁判員が「情」に左右されずに判断を下すことが、果たしてできるのでしょうか。

それにしても、今、日本の法曹界は、法曹制度の歴史の中で最大の山場を迎えているように感じます。今後注目が必要ですね。

— 本日は、お忙しい中、お話しいただきましてありがとうございました。